

しかし、あなたがたは

ペテロは、この手紙の受取人になった人々を、「ポントス、カパドキア、アジア、ピディニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ」と書き記しています。この「離散して、仮住まいしている選ばれた人」というフレーズは、手紙のキーワードのひとつです。わたしたちキリスト者の特徴を言い当てていますからとても大切です。わたしたちは安定・継続・永続を望むところがありますが、現実としてさまざまな荒波を経験してこの世から退場してゆく存在です。いま自分が安定している、この状況にずっと留まりたいと願っているならば、その状態のほうが特別であり、恵みなのだとかきまえておいた方が良いでしょう。むしろ現実には、仮住まいをさせて頂いており、天の故郷を目指す旅の途中なのだと言ペテロは語りかけます。仮住まいを示す聖書のギリシア語は、パレピデーモス、傍らに置かれた民の意味で、寄留者とも訳されます。信仰の父アブラハム以来、生まれ故郷と父の家を離れて、わたしの示す地へ行きなさいと命じられ、行く先も知らずに旅立った信仰者たちの系譜があります。17世紀のイギリスでも信仰の自由を求めてメイフラワー号で新大陸に向けて船出していった「ピルグリムファーザーズ(巡礼の始祖たち)」と呼ばれる者たちがいました。神に選ばれ、イエス・キリストに結ばれた結果、天に国籍をもつ存在とされた人々、死で終わらない生ける希望を与えられた人々、この新しいステージに招かれた人々は、古い世界に別れを告げ、大西洋に乗り出しました。新大陸と旧大陸というような比喩でアメリカとヨーロッパが比較されることがありますけれども、信仰によって生きるときに、わたしたちの有り様がすでに神さまによって変えられているのだから、それにふさわしい新しい生き方を身につけよう、散らされていった場所で

根付き芽吹いて生きてゆこう。そういう勧めがキリスト者に向けてなされています。

ペテロは、この新しい生き方を、2章では新しい建築に譬えて説明します。イエス・キリストという十字架で人々が殺して捨てた者が、じつは神にとっては尊い隅の頭石、すべてを土台で支える要石であった。復活された方なので尊い生きた石と表現されてもいます。そして、あなたがたはこのキリストに結ばれているのだから、新しい建物として立ち上げられなさいと勧めます。建物は土台の上に、いくつもの石が置かれたり、柱が建てられたり、しっくいや、梁や、屋根など色々な部分が組み合わされて一軒の家となります。つまり、ここでキリスト者個人の問題ではなく、キリスト者の群れで立ち上げる組織、聖書に言い方に従えば「主に召し集められた群れ」である教会が登場するのです。半田教会の旧教派であるメソジスト・プロテスタント教会の言葉で言い表すと「一人一役」、全員で教会のありかた、働きに参加するということになるでしょうか。ペテロは、教会をイエス・キリストを土台とする霊的な家として譬え、そして、それはわたしたちが聖なる祭司になって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して捧げるため、それが目的なのだと言いました。これをはっきりと言い表すのが9節、ペテロの手紙の中でも非常に有名な箇所です。

「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それはあなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです」

ここにペテロの考えるキリスト者の生きる意味と目的が示されています。今日の説教のなかでわたしが特に取り上げたいと願っているのが「祭司としてのわたしたち」についてです。この箇所ではわざわざそれを「王の系統を引く祭司」と言い直していますね。

祭司という働きは、イスラエルでは王、預言者とならぶ三つの大きな働きとされ、イエス・キリストにすべて備わっているものです。イエス様はイスラエル最後の王として、神の民イスラエルの背きの罪を負って十字架で殺された方です。ポンテオ・ピラトが「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と十字架に罪状書きを書いています。これは偶然ではありません。民の背きを代表者として身に受けて死なれたのです。これが王としての働きです。またイエス様は神の言葉を預けられた、といよりも生ける神の言葉そのものでありますから、神さまの言葉を預けられ、取り次ぐ働きを意味する真の預言者でありますし、そして、父よ、彼らをお赦してください、彼らは自分が何をしているかわからないのです、と祈られたように、神と人の間にたって執り成しをする祭司でした。王であること、預言者であること、祭司であること、これらすべてが生ける石であり、建築の土台であるキリストに備わっているのです。この上に霊的な家の一部として加えられ、結び合わされるわたしたちの働きは、ですから「王の系統を引く祭司」と言われるのです。あなたが、そうなのです。そのようにペテロは故郷から散らされて仮住まいの身となっている人々に告げるのです。あなたがたの使命は尊く重いものである、わたしたちはすべて、この主イエス・キリストに繋がれたことによって、神様の愛の御心を知らされているのだから、神さまと人との間に立って、執り成しの祈りをささげ、和解のために働く者となりなさい、と繰り返し勧めてゆきます。

今朝の説教題をわたくしは「しかし、あなたがたは」としました。ずっとこの手紙を読み進めてきて、ペテロが離散した仮住まいの人々に向かって主にある励ましを伝え、それ以前の生活を顧みて嘆くことのないように、後ろを振り向くのではなく前を向いて、死で終わる地上のものではなく、天に蓄えられている朽ちることも萎むことも汚れることもない資産を受け継ぐものとされていることを繰り返

返し思い起こし、福音信仰にたった生き様を築くように招く。ペテロは言います。「あなたがたはかつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」と語る。

さて週報の説教黙想に、ちょっと刺さる文章を引用しました。

「ねえ、年を取るってどういうことか分かる？年齢しか訊かれなくなるのよ」というものです。どこで記憶した言葉だったか思い出せずにいたのですが、朝日新聞で紹介されていた「100歳時代の新しい介護哲学」という本で紹介されていたものでした。年金の受給年齢が引き上げられたことにより、定年を60歳ではなく65歳に、またいずれは70歳にという議論が進み、じつは名古屋学院の理事会でもそういう話が出ています。ただわたくし自身もいまキリスト教の授業を名古屋学院で持っていますけれども、65歳まで年金の都合で単純に伸ばすのはどうかという感じをもっています。18歳くらいの男子高校生の群れと向き合う体力気力がなかなか絞れない。また昔のように生徒名簿を持って行って出席を取るというようなスタイルではなくて、この3年のコロナシフトで一気に教育現場のIT化が進み、アイパッドというコンピューターの端末を持って行って出欠を取る。ペーパーレスということもあって連絡が全部、端末上のアプリからくる。わたしはデジタルは大の苦手なものですから、これから覚えられる気がしない。ああ、こうして時代に取り残されていくんだろうなと思っています。これに関してはゆずり牧師のほうがはるかに通じていますね。やはり30代、40代の壮年世代の教職員が全体として学校を引っ張ってゆくのだらうと思うのです。ひとつの世代が社会に責任を持てるのは40年、定年の目安として成人年齢を20歳と考えて60歳としていたのは理由のないことではない。そういう実感を持つようになり、色々な働きを自分の下の世代に譲ってゆきたいと考えるようになりました。山に登ったら降りるまでを登山とい

う。上りっぱなしは遭難という、この言葉が好きで、下山の準備を始めなければと思っています。降りてと言われるまでやりなさいと先輩牧師は言うのですが、どうでしょうね。ただいずれにせよ人間は有限な存在ですから、社会的責任をはたす世代であることを終えて、社会でも家族でも後進に道を譲ってゆく。気力、体力が衰え、認知機能も少しずつ衰え、介護の対象となり、周囲の助けを借りながら終わりに近づいてゆく。それが人間の現実です。さきほどの「年を取るってどういうことか分かる？年齢しか訊かれなくなるのよ」という嘆きは、そうしたプロセスを経て、老人という言葉でひとくくりにされ、無名な存在とされていくことへのささやかな抗議とも読み取れます。コストパフォーマンスや、使えるか、使えないか、早いか遅いかのみが価値とされる世の中では必ずあがる声であろうと思います。あなたもいずれ老人になれば分かるということなのか。「しかし、あなたがたは」と御言葉は告げています。外なる人は衰えても内なる人は日々新たにされていく、それがキリスト者だとパウロは語りました。ペテロの言い方でいえば、生ける希望に、復活の主イエス・キリストに繋がれているからです。しかもあなたの働きは、この主イエスに託された祭司としての働き、人のために祈り、執り成す働きであると告げられています。世の人々は自分の叶えて欲しいことを訴えることが祈りだと思っています。わたしたちは違います。祈りは、わたしたちを愛し、独り子をくださった神さまとの生き生きとした交わりです。御言葉を頂き、御言葉にお応えし、自分のこと、自分の気にかけている家族のこと、隣人のこと、世界の痛み、軋み、嘆きを、神の前に出て担うこと、その姿勢がわたしたちの在りようをこの地上に望みを置いて生きるのではない。上からの力に支えられて生きる者へと変えてゆきます。神さまが変えてくださるのです。キリスト者に

定年はありません。最後まで、祈る人として、執り成す人として神に用いられて生きる。そのようなこの町の救いのために、愛する人々の和解のために心を砕き、御前に出る時を大切にすることが、神さまに喜ばれる霊的な家としての教会、王の系統を引く祭司に任命されたあなたの新しい使命であることを自覚してほしいとペテロはこの手紙を通して、わたしたちを招いています。あなたがそのように神さまに用いられます。あなたはいま神さまの憐れみを受けたのですから、憐れみを受けた者として、他者を隣人とし、その方の上にも、主の憐れみが豊かに注がれるように祈りの手を上げるようにと、キリスト者の歩みが仕える者として、執り成し手として、祭司の努めを負うものであることを今朝、わたしたちに語りかけたのです。

お祈りいたします。